

学会記事

第23回徳島医学会賞及び第2回若手奨励賞受賞者紹介

徳島医学会賞は、医学研究の発展と奨励を目的として、第217回徳島医学会平成10年度夏期学術集会（平成10年8月31日、阿波観光ホテル）から設けられることとなり、若手奨励賞は第238回徳島医学会平成20年度冬期学術集会（平成20年2月15日、長井記念ホール）から設けられることとなりました。徳島医学会賞は年2回（夏期及び冬期）の学術集会での応募演題の中から最も優れた研究に対して各期ごとに大学関係者から1名、医師会関係者から1名～2名に贈られ、若手奨励賞は応募演題の中から最も優れた研究に対して1名に贈られます。

第23回徳島医学会賞は次の2名の方々の受賞が決定し、第2回若手奨励賞は次の1名の方に決定いたしました。受賞者の方々には第240回徳島医学会学術集会（冬期）授与式にて賞状並びに副賞（賞金及び記念品）が授与されます。

尚、受賞論文は本号173～180、187～190頁に掲載しております。

徳島医学会賞

（大学関係者）



氏 名：菊地 浩子
生 年 月 日：昭和60年8月27日
出 身 大 学：同志社女子大学生活
科学部食物栄養科学
科管理栄養士専攻
所 属：徳島大学大学院ヘル
スバイオサイエンス
研究部臨床栄養学分
野

研 究 内 容：腸管トランスポーターを分子標的とした
腎疾患治療法の確立をめざして

受賞にあたり：

この度は、第23回徳島医学会賞に選考していただき、誠にありがとうございます。選考委員の先生方をはじめ関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

近年、慢性腎不全の患者数や透析患者数の増加が問題となっています。慢性腎不全（CKD）においては、腎

臓における代謝調節機能が低下しているため、腸管機能を考慮した治療が重要になると考えられています。しかしながら、現在、CKDにおける腸管機能の変動について詳細は明らかではありません。そこで、腎不全モデルラットを作成し、DNA マイクロアレイチップを用い、腸管遺伝子の網羅的発現解析を行いました。

その結果、CKD では腸管において栄養素代謝に関わる遺伝子群、特に多数のトランスポーターが発現変動しており、栄養素代謝に影響を及ぼしている可能性を見出しました。将来、腸管 CKD 変動遺伝子群を標的としたさまざまな治療や機能性食品の開発が期待できると考え、さらなる研究を行っていきたいと考えています。

最後になりましたが、本研究・活動を行うにあたり多くのご指導、ご助言を頂きました武田教授、山本助教、同講座の皆様へ厚く御礼申し上げます。

（医師会関係者）



氏 名：松岡 優
生 年 月 日：昭和23年12月17日
出 身 大 学：徳島大学医学部医学
科
所 属：徳島市民病院

研 究 内 容：川崎病は今も増え続けている
ー徳島県下10年間の集計ー

受賞にあたり：

年長者が受賞するのはいかなものかと躊躇しましたが、院内における50代の先生が「いい年して、発表やできんわナ」とか20代の「忙しいので、ちょっと」の声を聞き、背中で見せようと考え発表させていただきました。「人に役立つように」の思いから一生、勉強・研究されている森博愛名誉教授や三好和夫名誉教授の姿は大尊敬です。

川崎病は日本に多く、ますます増加しています。徳島県における発生数は常に上位で、過去2度ほど日本1位になりました。川崎病の原因も増加する要因もわかっていますが、（1）免疫能が未完全な乳幼児に多いこと、（2）なんらかの感染がきっかけになること、（3）再発率、同胞発生率、日本人に多いことなど遺伝的かかりやすさがあること、（4）病因に対して免疫が異常反応を起こし高サイトカイン血症になっていること、（5）

血管炎が主で動脈瘤、ひいては動脈硬化や心筋梗塞のリスクファクターを残すことなどがわかっています。

川崎病の増加を止めるためにも、また予後改善のためにも、今後も徳島県全下の全ての医療機関の協力を受け、登録等を通して、徳島発の新知見を発表できたらと考えています。なお、今回の発表の中の常在菌である α -溶連菌のペニシリンに対する耐性化、川崎病後のアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、アトピー性皮膚炎へのなりやすさは世界初の知見です。

若手奨励賞



氏 名：近藤可菜^{こんどうかな}
 生年月日：昭和58年6月1日
 出身大学：徳島大学医学部医学科
 所属：徳島大学卒後臨床研修センター

研究内容：重症心不全患者におけるHOTとAdaptive-servo ventilatorの効果の検討（肺動脈性高血圧に伴う右心不全に対してのAdaptive-servo ventilatorの効果）

受賞にあたり：

この度は、徳島医学会第2回若手奨励賞に選考いただき、誠に有難うございます。選考していただきました先生方ならびに関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

私は循環器内科での研修中に数例の肺高血圧症を経験し、症状が徐々に進行していく厳しさを目の当たりにしました。今回の発表内容のように、副作用の少ない治療法で、血行動態や自覚症状の改善を得ることができるということは、生命予後のみならずQOLを高めるという点においても大変意義のあることだと思います。

私の初期研修は循環器内科から始まりました。その前の月には学生であった、本当の新人の私を熱心に指導していただき、また今回も発表の場を与えてくださった先生方に厚く御礼申し上げます。臨床を学ぶと同時に、新しい治療法や機序を見出す研究の重要性、楽しさを学ぶことが出来ました。これからも医師としてその姿勢を忘れずに精進していきたいと思います。

最後になりましたが、4月から私たち研修医を家族のように支えてくださり、また応援してくださる卒後臨床研修センターの谷先生、西先生、山本先生、スタッフの皆様々に厚く御礼申し上げます。